

誰か後ろの扉をトントンとたたく者がありました。今頃、誰だろう、ゴーシュは思いました。「ホーシュ君かい。」ゴーシュはわざと寝ぼけたように叫びました。ところがスゥと扉を押して入って来たのは、今まで五、六回見たことのある大きな三毛猫でした。ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来て、ゴーシュの前におろして言いました。「ああ、くたびれた。なかなか運搬は大変だな。」「何だと」ゴーシュが言いました。「これは、お土産です。食べてください」三毛猫が言いました。ゴーシュは昼からのむしゃくしゃをはらすように怒鳴りつけました。「誰がきさまにトマトなど持ってこいと言った。第一オレがきさまらのもってきたものなど食うものか。それから、そのトマトだってオレの畑のやつじゃないか。何だ、赤くもならないやつをむしって、今までトマトの茎をかじったり、けちらしたりしたのはお前だろう。早く帰れ。憎らしい猫め。」すると猫は肩をまるくして、目をすぼめてはいましたが、口のあたりでニヤニヤ笑って、意味ありげに言いました。「先生、そうお怒りになっちゃ、お体にさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさいませ。聴いてあげますから」「生意気なことを言うな。猫のくせに。」セロひきはしゃくにさわってこの猫のやつをどうしてくれようとしばらく考えました。「いや、ご遠慮はいりません。どうぞひいてください。私はどうも先生の音楽をきかないと眠れないのですから。」猫は、ゴーシュがイライラしている